読書

日米地位協定

明田川　融著

思考停止させないために

米国は世界に800以上の軍事基地を置き、45の国と地位協定を締結している。そのなかで、日米地位協定の「不平等協定」性は際立っている。本書は、その生成と展開の過程を歴史的に追いながら、米側が享受している特権や減免措置、日本法令の特例や適用除外の設計と運用の問題性に切り込む意欲作といえる。

例えば、類例のない「全土基地方式」。「日本区域の全土が、軍隊（米軍）の防衛作戦のための潜在区域」とみなす発想は、マッカーサーの「6・23メモ」に遡及する。やがて「小突きの序列」を経由して、本土の基地は沖縄へとしわ寄せされ、「無期限ないし半恒久的な〝基地のシマ〟」というリアルが続いている。

「安全保障の領域で、モノ・カネ・ヒトの三分野にわたって米国にこれほどの協力を与えている国が他にあるだろうか」と著者は問う。米軍駐留経費負担率はドイツ約3割、イタリア・韓国約4割に対し、日本は7割超。1978年度からの「思いやり予算」は年々増額され、今年で40年だ。

米兵犯罪についても、日本側刑事裁判権の最小化が進み、日本側が第1次裁判権を有する事件のうち、実に97%が放棄されたという。背後には密約の存在があった。

ドイツや韓国などは地位協定の改定に取り組んできたのに、日本だけは専ら運用改善で対応しようとしている。安倍晋三首相は憲法改正にことのほか熱心なのに、地位協定改定にはあきれるほど冷淡であるのはなぜか。

かねて評者は「迎合と忖度の日米安保」と言ってきたが、著者は日米安保の「体制疲労」を指摘する。協定の上位にある条約の根本的再検討が求められるゆえんである。

なお、本書が協定の政治史的考察に主眼があるため、条文上のさまざまな仕掛けについては、本書の視点からのさらなる読解と分析が必要だろう。

「安全のために基地は必要だ」というところで立ち止まり、思考停止してしまわないために、本書をおすすめしたい。

（水島朝穂・早稲田大教授）

みすず書房　3,888円

精神鑑定はなぜ間違えるのか？

岩波　明著

著名な事件に斬新な見解

大阪教育大付属池田小に刃物を持った男が侵入し、児童8人を殺害した事件は、いまだ記憶になまなましい。

おりしも私は精神医療を取材しており、ある精神科病院のテレビで第一報を知った。事件後、入院患者よりもその家族が大変な衝撃を受けていたのを、よく覚えている。

著者によれば、犯人の宅間守元死刑囚は子ども時代、典型的な注意欠陥多動性障害（ADHD）の症状を呈し、それをベースに統合失調症か、もしくはその関連疾患の症状としての被害妄想などがあらわれていたという。私は当時、事件に関する報告や分析を読みあさったが、これほど明解な記述に接したことはなかった。

著者の言うとおりなら、元死刑囚は児童期にADHDの治療をきちんと受け、症状を改善させておけば、後年あのような惨劇を引き起こさずにすんだのかもしれないということになる。後付けの対策と切り捨てるのはたやすい。だが本書を読むと、彼が児童期以降も適切な治療の機会を何度も逸していた事実に、がくぜんたる思いがするのだ。

本書には、2006年の、渋谷・夫殺害・切断事件、1999年の、池袋の通り魔事件のほか、永山則夫元死刑囚による連続4人射殺事件や、帝銀事件のような昭和史に残る大事件がとりあげられ、ベテラン精神科医の著者による斬新な見方が多々示されている。

私自身、これらの事件に関する書籍の何冊かに目を通してきたが、著者の指摘で長年の疑問が氷解した点がいくつかあった。永山元死刑囚に対する死刑執行に、神戸で起きた、連続児童殺傷事件が影を落としているとの見方があろうとは…。

精神鑑定の誤りは、従来もしばしば問題視されてきた。大本の原因は、著者の言うように「精神医学が不完全な学問であること」に尽きる。精神鑑定のシステムそのものの見直しは急務だが、それが容易ではないこともまた本書は告げている。（野村進・ノンフィクションライター）

光文社新書　821円

貧困の戦後史

岩田　正美著

社会状況が表す「かたち」

貧困研究の第一人者による戦後の通史である。何を貧困とするかは、所得水準などで一義的に決まるわけではない。敗戦直後や高度経済成長期といった時代が、どのような貧困の「かたち」を生み出したのか。統計や、「女性」「子ども」といった属性ごとの変遷を追うのではなく、社会状況との関連の中で貧困の「かたち」を考えたのが、本書の特徴だ。

たとえば国民の4割が一日に一食も白米を食べられなかった「みんな貧乏」の敗戦直後にも、上野駅地下道などに集まる「浮浪者」「浮浪児」は、ときに先天的な気質に基づく「浮浪」だと差別視された。「ニコヨン」と称された登録日雇いなど復興期の失業対策事業は、政策が貧困に「かたち」を与えた。「闇の女」のように、マスコミが名付けることもあるし、ときには適当な統計の不存在から、当時の貧困の「かたち」が浮かび上がることさえある。

著者は、社会状況というフィルターを通って表れ出た貧困の「かたち」とその変遷を見据える。「かたち」は所得水準や居住形態を含む人々の生活実態である以上に、社会との関係を体現している。社会学者としてのこだわりだろう。

したがって激動の戦後は、多様な貧困の「かたち」を生み出したーはずなのだが、一方で本書は、時代を貫く共通点も浮かび上がらせる。

貧しいとき（敗戦直後）も、豊かなとき（一億総中流社会）も、成長期（復興から高度経済成長）も、停滞期（「失われた20年」）も、貧困はいつも、個人の能力や資質、意欲の問題に還元され、市場に吸収・隠蔽されてきたことに加え、人々の治安上の不安をかきたててきたという点だ。

社会に浸透し、溶け出し、「かたち」すら不明瞭になった貧困を放置することは、「この社会の不安と分断を不気味に拡大させていく」と、著者は警告して本書を締めくくる。次の時代、次の世代に、重い宿題を残す一冊だ。（湯浅誠・社会活動家、法政大教授）

筑摩選書　1,944円

新著の余録

13世紀後半、日本は2度の蒙古襲来を「神風」によって救われた―。そう信じている人は少なくないだろう。しかしよく考えると、出来過ぎた話ではないだろうか。九州大名誉教授でまもと文学・歴史館館長の服部英雄さんは新著「蒙古襲来と神風」で、その真相に実証的に迫った。

「きっかけは、九州大の図書館で見つけた、日清・日露戦争に従軍した陸軍少佐の書いた文献でした」。そこに、1274年の1度目の襲来（文永の役）で敵軍が1日で引き揚げていったとされていることが、軍事技術上あり得ないと書かれていた。「調べてみると、『風のために1日で帰った』とはどの史料にも書かれていない。これは一体どういうことだろうと思いました

「蒙古襲来と神風」服部　英雄さん

通説の矛盾を徹底追究

はっとり・ひでおさん　1949年生まれ、熊本市在住。「河原ノ者・非人・秀吉」で毎日出版文化賞。著書に「蒙古襲来」など。

ね」

通説が依拠してきた史料を、その記述の信用度も含めて精査した服部さんの結論はこうだ。まず、文永の役の際に嵐は起きていない。81年の2度目の襲来（弘安の役）では、台風が敵軍の一部に被害を与えたが、その後も合戦は続き、日本側は時には「ふん尿」をも投げ付け、死に物狂いで戦った。日本の船も沈め、国土を荒らした台風を「神風」と呼んだのは、後世の人々だ。

執筆の背景には近年の風潮への懸念があった。「特攻隊への賛美が、このところも、本書は伝える。

名古屋市生まれ。「中高生の頃は自転車で城跡を回る『城少年』でした」。東京大を卒業後、同大助手を経て、文化庁で16年間、遺跡保護の仕事にも携わった。学術界の外での経験が、史料の記述をうのみにせず、合理性を重視する姿勢につながったという。

現在取り掛かっているのは、皮革業に従事した被差別民の歴史。重視しているのは、官側の史料だけでは見えない「下からの視点」だ。「過去の研究の矛盾に気付いたら、徹底的に明らかにするのは歴史学者の務めです」

（中公新書・929円）

ベストセラー

県内	東京
❶吉野源三郎原作、羽賀翔一漫画「漫画　君たちはどう生きるか」（マガジンハウス・1,404円）	❶「日経エンタテインメント！NGT48Special」（日経BP社・1,620円）
❷若竹千佐子著「おらおらでひとりいぐも」（河出書房新社・1,296円）	❷朝日新聞出版編「ほんものの京みやげ」（朝日新聞出版・1,296円）
❸佐久間健一著「モデルが秘密にしたがる体幹リセットダイエット」（サンマーク出版・1,080円）	❸長谷川嘉哉著「一生使える脳」（PHP研究所・929円）
❹佐藤愛子著「九十歳。何がめでたい」（小学館・1,296円）	❹佐藤航陽著「お金2.0　新しい経済のルールと生き方」（幻冬舎・1,620円）
❺吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」	❺ヨグマタ相川圭子著「ヒマラヤ大聖者慈愛の力奇跡の力」